



2021年3月館員おすすめの本

『あやうく一生懸命生きてこだった』(ハ・ワン)

吉田 梨紗



コロナ禍で不自由な毎日に加え、季節・環境の変化で疲れやストレスを感じる方には本書をオススメします。一生懸命やってきたけどなんのために頑張っているのかと疑問に感じたり、もっと自由に生きたいなあ等、誰もが一度は考えたことがあると思います。

本書は一生懸命頑張るのも大事だけど、「肩の力を抜いてみてもいいんじゃない」とゆるく語りかけてくれます。著書の体験談からストレス社会を生き抜くためのヒントが見つかると思います。コロナ禍のこんな時だからこそ、自分の気持ちとゆっくり向き合う時間も大切かもしれません。(ダイヤモンド社)

『また次の春へ』(重松清)

原 真由美

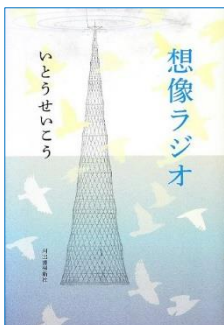
7つの短編に登場する主人公はみな東日本大震災に関わった人たち。あの日、海へ釣りに行く友人を引き留められなかった自分を責め続ける女子高生。母親を亡くした幼い兄弟たちに父が精一杯作ってくれたトン汁を、今は被災者にふるまう男性。行方不明の両親の生還は諦めているけれど区切りをつけて終わりにするのをためらう人。「考えてもしかたのない後悔」に苛まれながらも「運命なんだよ、いろんなことぜんぶ」と受け容れざるを得ない人たち。理不尽な運命に押し流されながらも過去を慈しみ、未来に向かって歩む姿が見せる強さと優しさ、喪失の悲しみから生まれる再生への物語です。



(扶桑社)

『想像ラジオ』(いとうせいこう)

大久保美玲



2011年3月11日の震災直後から、津波に襲われた街でDJアークが放送する「想像ラジオ」。彼は津波にさらわれ、木の上にひっかかったまま自分が死んでいるのも知らずに、妻と息子に声を届けるために深夜2時から明け方までひたすらしゃべり続けています。その電波は震災で失われた多くの魂や、大切な人を失い悲しみの底にいる生者に届き、共鳴し、慰め、励まし合いながら、旅立つまでを応援する声になっていきます。DJアーク自身も様々な魂との交流を経て、自らの死を受け入れていきます。「想像」と「悲しみ」は死者と生者が共振する電波のようなモノだと、DJアークは言います。死者と生者がお互いその死を受け入れ本当に悲しむことができた時、死者は別の世界に旅立つことができ、生者は少しずつ前を進むことができるのかもしれない。

(河出書房新社)